

基礎看護学実習 I 訪問実習の教育効果と課題

吉田美穂¹⁾*・多田めぐみ¹⁾・山本智恵子¹⁾・赤田いづみ¹⁾・土井英子¹⁾

1) 新見公立大学健康科学部看護学科

(2021年12月1日受付、12月22日受理)

本研究の目的は、基礎看護学実習 I 訪問実習における、地域で暮らす対象への看護の機能に関する学生の学びから訪問実習の内容を評価し、教育効果と課題を明らかにすることである。本研究に同意が得られた基礎看護学実習 I 訪問実習を履修した学生81人のレポートに記載された内容について、内容の類似性に沿ってカテゴリー化を図った。その結果、【全人的な対象理解】【信頼関係を築く関わり】【対象の状況を踏まえた解釈・判断】【個別性を重視した専門的な関わり】【自律性を尊重した関わり】【健康生活への基礎的知識の普及】の6つのカテゴリーが抽出された。学生は、看護の対象に健康から逸脱した人のみではなく「健康な人」も含まれ、より健康な生活への看護の機能について学びを得ていた。このことから、入学早期に地域で生活する人を対象とした実習を行う必要性が確認できた。

(キーワード) 基礎看護学実習、学び、健康、ヴァージニア・ヘンダーソン

はじめに

国は医療提供体制を見直し、地域包括ケアシステムを推進しており、これまでの「病院完結型」の医療ではなく、地域での療養生活を支える「地域完結型」の医療提供体制の構築が求められている¹⁾。

2022年より適用される保健師助産師看護師学校養成所指定規則の第5次改正は、社会の変化を反映させたものである。地域包括ケアシステムにおける「地域包括ケア」は、地域住民が住み慣れた地域で安心して尊厳あるその人らしい暮らしを継続できるように、介護保険制度などのフォーマルサービスのみならず、インフォーマルな助け合いのような社会のしくみを支えるものであり、看護基礎教育でも地域包括ケアシステムを推進する能力をつけていく必要がある²⁾。つまり、医療を支える看護職者には、生活が営まれるあらゆる場で、健康課題を抱える人々のニーズに対応し、支援できる実践能力が求められている。さらに、看護の対象は地域で暮らすすべての人と位置づけ、疾病や障害の予防活動を重視することを意図として、今回の指定規則改正で在宅看護論が「地域・在宅看護論」となり、基礎看護学の次に位置づけられた³⁾。地域での暮らしを支えるには、日々の生活と同時に長いスパンで個々の生活信条や生活習慣、価値観などをしっかりと理解して関わるという意図で、「生活」から「暮らし」を支援するという観方の重要性も示された³⁾。

A大学看護学科では、1年次に基礎看護学実習 I を開講している。目的は「看護が実践されている場を通して、看

護の対象と対象の抱える健康問題、看護の機能を理解する。また、対象とコミュニケーションを図る能力を養うとともに、看護者としての基礎的能力を養う」である。病院実習から開始した本実習は、社会福祉施設での実習を導入し、さらに、地域で生活する人を対象とした実習を「訪問実習」として導入し、病院、施設、地域の3か所で実習を展開している。訪問実習の対象は地域で生活する人であり、1年次夏期休業中の2日間にて実施している。学生は病院や施設で実際目にしていない対象の入院生活は捉えることができるが、対象から聞く入院前の日常生活の様子については、話だけではイメージができず、捉えることが難しい現状があり⁴⁾、入学後早期に地域において実習を行う必要があると考える。

本研究では地域で生活する対象への看護の機能に関する学生の学びを明らかにし、訪問実習の教育効果について評価することを目的とする。

1. A大学看護学科 基礎看護学実習 I の概要

A大学看護学科では、基礎看護学実習 I を1単位45時間、1年次通年で開講している。施設・病院・訪問と3つの実習で構成している。本稿では訪問実習に関する内容について取りあげる。

1. 基礎看護学実習 I の目的・目標

《目的》

看護が実践されている場を通して、看護の対象と対象の抱える健康問題、看護の機能を理解する。また、対象とコ

*連絡先：吉田美穂 新見公立大学健康科学部看護学科 718-8585 新見市西方1263-2

コミュニケーションを図る能力を養うとともに、看護者としての基礎的能力を養う。

《目標》

1. 対象者と直接的・間接的に関わることにより、看護の対象者の生活状況を理解する。
2. 対象者の生活を取り巻く環境について理解する。
3. 看護の場における対象と看護者の援助関係について理解する。
4. 病院・施設・自宅における看護の機能について理解する。
5. 看護者としての基本的態度を養う。

2. 訪問実習の概要

1年次夏季休業中に対象とともに過ごし観察する、または生活状況について聞き取りを行うという内容で実施しており、地域における対象の生活行動および生活習慣を知り、対象の健康な生活について考えることをねらいとしている。実習対象者は主に家族や友人である。

実習記録は、ヴァージニア・ヘンダーソン（以下、ヘンダーソン）の看護論⁵⁾をもとに作成した。ヘンダーソンは看護の対象を健康人・病人・終末期とあらゆる健康レベルの人も含むと定義し、看護の援助を必要とする人は、「体力・意思力・知識」のいずれかが不足しているために適切な行動がとれないと考え、「その足りない部分の担い手」になることが看護の機能であることと、その人が自立できるようにしむけることが看護援助であるということを明確に表現している。その上で看護を必要とする人の基本的ニ

ードとして14の要素を挙げている。

実習記録では、基本的欲求の14項目それぞれに「情報（対象者が語ったこと、ともに過ごし気付いたこと）」を記載し、この情報から「より健康な生活を過ごすために必要なこと」をアセスメントするよう求めた（図1）。さらに訪問実習を終えて「地域で生活している対象者がより健康な生活を送るために看護学生としてできること」というテーマでレポート提出を求めた。

II. 方法

1. 対象者

2020年度にA大学基礎看護学実習 I を履修した看護学科1年生84人のうち、本研究への同意が得られた81人。

2. 方法

1) データの収集

研究対象者が提出した訪問実習記録に記載された地域で生活する対象への看護の機能に関する内容を分析対象とした。

2) 分析方法

地域で生活する対象への看護の機能に関する内容について、その意味内容一つごとに文章をまとめる、または文章を区切ってデータ化を行い、内容の類似性に沿ってカテゴリー化を図った。分析は、研究者間で合意が得られるまで複数回実施した。

5. 倫理的配慮

対象学生に調査の主旨、自由意思の尊重、成績評価には関係しないこと、匿名性について文書と口頭で説明した。新見公立大学倫理審査委員会の承諾を得て実施した（承諾番号215）。

III. 結果

本研究への同意が得られた81人の訪問実習レポートから、地域で生活する対象への看護の機能に関する学びを抽出した。84コードが抽出され、14サブカテゴリー、6カテゴリーで構成された（表1）。

本文中の【】はカテゴリー、《》はサブカテゴリー、[]はコード、()は意味が分かるように付け加えた内容を示す。

1. 【全人的な対象理解】

このカテゴリーは、《相手の価値観を認めた関わり》《背景を踏まえた対象理解》《相手を理解し寄り添う》という3つのサブカテゴリーで構成された。

《相手の価値観を認めた関わり》では、[相手を尊重した姿勢で情報や技術を提供する]ことの重要性に気づいており、対象の[生き方を認識し尊重する]ことを認識していた。《背景を踏まえた対象理解》では、[（職業歴や趣

ヘンダーソンの14の基本的欲求	情報 (対象者が語ったこと、ともに過ごし気付いたこと)	より健康な生活を過ごすために必要なこと	より健康な生活を過ごすために必要なことと捉えた根拠
①正常に呼吸する			
②適切に飲食する			
③あらゆる排泄経路から排泄する			
④身体を動かし、またよい姿勢を保持する			
⑤睡眠と休息をとる			
⑥適切な衣服を選び、着脱する			
⑦体温を正常範囲内に維持する			
⑧身体を清潔に保ち、身だしなみを整える			
⑨環境のさまざまな危険因子を避け、他人を傷害しないようにする			
⑩自分の感情、欲求、恐怖あるいは気分を表現して他人とコミュニケーションをもつ			
⑪自分の信仰や価値観に従って行動する			
⑫達成感をもちたらしめるような仕事をする			
⑬遊びやレクリエーションに参加する			
⑭正常な発達および健康を導くような学習をし、発見し、好奇心を満足させる			

図1. ヘンダーソンの14の基本的欲求に基づいた基礎看護学実習 I 訪問実習記録

表 1. 地域で生活する対象者への看護の機能に関する学び

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	コード数
全人的な対象理解	相手の価値観を認めた関わり	相手を尊重した姿勢で情報や技術を提供する	3
		本人の生き方を認識し、尊重する (職業歴や趣味など)過去の背景を理解する	
	背景を踏まえた対象理解	相手の立場にたつて(健康について)考える	5
信頼関係を築く関わり	適切な距離感を保つ	適切な距離感を保つ	4
		不安を取り除くための関わり	
	安心感を与えるコミュニケーション	笑顔で接する 会話を楽しめるように関わる	5
対象の状況を踏まえた解釈・判断	生活習慣を把握するための観察・情報収集	生活や言動をよく観察する	7
		対象者の全体像をとらえるために情報を収集する	
	情報から問題点をアセスメントする	本人が気づかない問題点を見つける 対象者が認識していない健康から逸脱した点を見つける	7
個別性を重視した専門的な関わり	より健康な生活習慣への介入	生活習慣に合わせた指導を行う	5
		規則正しい生活習慣を確立するために支援する	
	専門的知識を活用した関わり	根拠に基づいたアドバイスを提供する より良い行動がどのような効果を持つか伝える 健康への関心度に応じた情報を提供する	14
自律性を尊重した関わり	本人が健康を意識するきっかけづくり	対象者に理解できるように情報を提供する	4
		本人が健康を意識するきっかけづくり	
	その人らしさを支える	生活習慣を見直すきっかけをつくる 自分の健康は自分で守るという意識を持ってもらうように関わる 本人が自分自身と向き合う機会をつくる その人らしい生活を送れるようにサポートする	14 3
基礎的知識の普及	健康な生活への基礎的知識の普及	生活習慣を改善するための基礎的知識を広める	1

味など)過去の背景を理解し]、[相手の立場になって(健康について)考える]ことの重要性を学んでいた。《相手を理解し寄り添う》では、[生活の中で楽しみを見つけるために一緒に何か行う]といった、生活を豊かにすることの重要性に気づいていた。

2. 【信頼関係を築く関わり】

このカテゴリーは、《適切な距離感を保つ》《安心感を与えるコミュニケーション》《相談しやすい雰囲気づくり》という3つのサブカテゴリーで構成された。

《適切な距離感を保つ》では、[不安を取り除くための関わり]を実践することを意識しながらも、対象の生活に干渉しすぎることもよくないと感じ、[適切な距離感を保つ]ことを心がけていた。《安心感を与えるコミュニケーション》では、[笑顔で接する]、[会話を楽しめるように関わる]ことで安心感を与えることができると認識していた。《相談しやすい雰囲気づくり》では、[対象者が自分の感情や気分を表現したり、会話したりする機会を増やし]、[相談しやすい関係をつくる]よう働きかけることの重要性を学んでいた。

3. 【対象の状況を踏まえた解釈・判断】

このカテゴリーは、《生活習慣を把握するための観察・情報収集》《情報から問題点をアセスメントする》《より健康な生活習慣への介入》という3つのサブカテゴリーで構成された。《生活習慣を把握するための観察・情報収集》では、看護的視点をもって[生活や言動をよく観察し]、[対象者の全体像をとらえるために情報を収集する]ことの必要性を学んでいた。《情報から問題点をアセスメントする》

では、学生がよく観察することで[本人が気づかない問題点を見つける]ことを実践していた。《より健康な生活習慣への介入》では、対象は一見、健康問題がないと思われたが、生活リズムが整っていないことに着目し、より健康になるために[規則正しい生活を確立するために支援する]ことの必要性を学んでいた。

4. 【個別性を重視した専門的な関わり】

このカテゴリーは、《専門的知識を活用した関わり》《個別性を尊重した情報提供》の2つのサブカテゴリーで構成された。《専門的知識を活用した関わり》では、対象に合わせて、これまでに習得した専門知識をもとに[根拠に基づいたアドバイスを提供する]ことの必要性を学んでいた。《個別性を尊重した情報提供》では、[健康への関心度に応じた情報を提供する]、[対象者に理解できるように情報を提供する]といった、対象者の発達段階などを考慮した関わりについても気づいていた。

5. 【自律性を尊重した関わり】

このカテゴリーは、《本人が健康を意識するきっかけづくり》《その人らしさを支える》という2つのサブカテゴリーで構成された。《本人が健康を意識するきっかけづくり》では、対象から生活習慣について聞くことにより、[自分自身と向き合う機会をつくり]、[生活習慣を見直すきっかけをつくれる]のではないかと気づいていた。さらに、より健康になるために自分の身体に興味をもってもらい、[自分の健康は自分で守るという意識を持ってもらうように関わる]ことの必要性を学んでいた。《その人らしさを支える》では、[その人らしい生活を送れるようにサポ

ートする]といった対象を尊重した関わりの重要性を学んでいた。

6. 【健康な生活への基礎的知識の普及】

このカテゴリーは、《基礎的知識の普及》という1つのサブカテゴリーで構成された。学生は学び始めたばかりで知識が浅いとはしながらも、地域で暮らす対象が[生活習慣を改善するための基礎的知識を広める]ことでより健康な生活へつながることに気づいていた。

IV. 考察

1. 訪問実習で学生が学んだ看護独自の機能

基礎看護学実習Ⅰ訪問実習を履修した学生が捉えた、地域における看護の機能をヘンダーソンが提唱した「看護独自の機能⁵⁾」に沿って考察する。

1) 看護の対象

学生は、これまで一緒に暮らしてきた家族であっても価値観、生活習慣が自分とは異なることに気づき、《相手の価値観を認めた関わり》の必要性を理解していた。看護とは病気ではなくそれに会っている人間をみることを常に優先させるべきとヘンダーソンが述べているように、[本人の生き方を認識し、尊重する]態度で、看護において欠くことのできない【全人的な対象理解】の必要性を認識できており、相手を尊重することを基盤として関係性を構築している⁶⁾ことがうかがえた。

また、[笑顔で接し][相談しやすい関係をつくる]ことで《安心感を与えるコミュニケーション》を実践していた。ヘンダーソンが示す「看護師は必然的に誰かの解釈者であり」、治療場に「建設的関係」は不可欠と述べ、先行研究においても「患者と看護師の信頼関係の構築⁷⁾」が重要であると分析されている。本研究の結果でも、対象と【信頼関係を築く関わり】が必要であることを理解していた。

2) 対象に合わせた援助

本実習の対象は地域で暮らす健康な人であるが、《より健康な生活習慣への介入》の必要性を理解し、看護の対象が患者だけではないことを学んでいるといえる。このことは、ヘンダーソンが、看護の対象に「健康な人」を加えた内容を理解していると説明できる。

次に「対象者が認識していない健康から逸脱した点を見つける」ことは、ヘンダーソンが述べた、看護の援助を必要とする人の「不足した部分」を抽出し、補うことが看護の機能であると捉えることができたと言明できる。対象者が気づいていない健康問題を専門的に捉え、アプローチすることの必要性を理解していた。この学びの内容は、個別の看護を提供するために必要な思考過程であり、平成23年に策定された学士課程版看護実践能力と到達目標⁸⁾で提示されたコアとなる看護実践能力の中の「根拠に基づき、

看護を計画的に実践する能力」にあたると思われる。1年次生である学生が、対象者の問題を認識し、問題を明確にするために情報収集ができていたことは評価でき、対象に合わせた援助の必要性を理解できたと考えられる。

3) 自立へ向けた関わり

学生は既習の専門知識を活用しながら対象者と関わり、より健康な生活を送るために《専門的知識を活用した関わり》の必要性を理解したと考える。さらに、対象者の背景や健康に対する認識が多様であるため、専門知識をどのように活用するか《個別性を尊重する》必要性についても理解していた。

また、訪問実習の対象とコミュニケーションを図ること自体が[生活習慣を見直すきっかけ]であると認識していた。さらに、[自分の健康は自分で守るという意識をもってもらうように関わる]という学びは、ヘンダーソンが述べた、「意思力」つまりは、対象が健康を意識するきっかけへのアプローチであり、【自律性を尊重した関わり】の重要性を認識したと思われる。

さらに、ヘンダーソンは基本的欲求の構成要素14番目に「患者(対象者)が学習するのを助ける」と掲げている。【健康な生活への基礎的知識の普及】では、コードは1つであったが、ヘンダーソンが示した人間の欲求から看護ケアを引き出すという原理が、病的状態に対するケア提供活動におけるのと同じように、健康増進活動においても指針となるという内容を説明できると考える。看護の場を「家庭、病院、学校、工場などあらゆる看護の場」としたことも合わせて説明できる。さらに、看護の主要な機能の1つに「教育・指導⁹⁾」があり、看護活動の場が地域へ広がりをもせている現在、看護職は十分にこの機能を発揮することが求められていることを意味すると考える。

2. コロナ禍における訪問実習の工夫

対象とともに過ごし観察する、または生活状況について聞き取りを行うという実習方法としていたが、新型コロナウイルス(COVID-19)の感染拡大を受け、一人暮らしの学生においては、実家へ帰省することができない状況であった。そのため、対象の生活の場へ入ることができない場合には、オンラインでの聞き取りによる実習となった。オンラインではあるが、対象に直接聞き取りを行うことができ、対象理解へつながったことは評価できる。しかしながら、オンラインでの聞き取りの場合、対象者の表情や反応を見ることができず一方的な質問になってしまうことが考えられる。訪問実習の効果を評価するにあたり、今後の社会状況を踏まえた実習目標や方法についての検討が必要であると考えられる。

3. 今後の課題と展望

本稿では学生の学びを通して、A大学看護学科で実施し

ている基礎看護学実習Ⅰの訪問実習のあり方を検討した。学生は看護の対象とともに対象の生活の場で過ごす、聞き取りを行うことで「生活者」として捉えることができおり、訪問実習のねらいは達成できたと考え。しかしながら、今回は実習後レポートのみを調査対象としており、目標の達成については明らかにできない。実習記録の分析も踏まえ、実習の効果を検証する必要がある。さらに、この基礎看護学実習Ⅰは訪問実習の他に病院実習、施設実習があり、3つの実習を履修し目標の到達を目指すため、すべての目標の到達については述べるできない。今後は、基礎看護学実習Ⅰ全体での実習のあり方を検討する必要があると考える。

謝辞

本研究を行うにあたり、調査にご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

文献

- 1) 厚生労働省, 地域包括ケアシステム, [インターネット On line], [2021. 11. 30] https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiki-houkatsu/
- 2) 池西静江・石束桂子：看護教育へようこそ第2版. 医学書院, 138, 2021.
- 3) 看護展望vol. 45 (4) 臨時増刊号, メヂカルフレンド社, 18-24, 2020.
- 4) 小野塚元子, 家根明子：地域包括ケア時代における在宅看護実習のあり方についての検討－地域住民とともに行った高齢者への家庭訪問実習での学生の学びの分析より－. 長野県立大学紀要, 23, 1-12, 2021.
- 5) ヴァージニア・ヘンダーソン：看護の基本となるもの. 日本看護協会出版会, 2016.
- 6) 相原ひろみ, 細田泰子：看護大学生の看護実践における倫理的行動に関する質的検討. 日本看護倫理学会誌, 12 (1), 11-19, 2020.
- 7) 今井恵, 松永早苗, 千田美紀子, 他5名：基礎看護学実習Ⅰにおける学生の学び－レポートの分析－. 聖泉看護学研究, 4, 39-46, 2015.
- 8) 文部科学省, 看護教育モデル・コア・カリキュラム, [インターネット On line], [2021. 11.30] https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/1397885.htm
- 9) 茂野香おる：系統看護学講座専門分野Ⅰ 看護学概論 基礎看護学Ⅰ. 医学書院, 61, 2020.